

学位請求論文審査報告書

氏名 東真行

論文題目 金子大榮研究—浄土顕揚の課題—

審査委員 主査 大谷大学教授 藤嶽明信

副査 大谷大学教授 村山保史
博士（哲学）〔関西学院大学〕

副査 大谷大学名誉教授 安富信哉
博士（文学）〔大谷大学〕

I 論文内容の要旨

金子大榮（1881～1976）は、清沢満之（1863～1903）の思想に影響をうけるとともに、仏教や真宗に関して独自の思想を提示していった人物である。本論文は、金子大榮の生涯における思想の展開を研究したものである。その際に金子の生涯を仮に三期（初期、中期、後期）に分け、そのなかでも特に中期に軸足を置いて考察している。

本論文は六章で構成されている。第一章は金子における初期の思索の展開、第二章は「真宗学」という金子による学問論、第三章から第五章までは金子の『浄土の観念』における思索を中心とした浄土観、そして第六章は金子による『教行信証』読解を取り上げている。

論文の目次は次のようになっている。

序

はじめに—完全燃焼の生涯—

本論の構成

金子大榮研究の状況と本論の位置

第一章 初期の思索

第一節 如来中心の救済

第二節 「如来中心の救済」に至るまで

第三節 思想的苦悩からの脱却

第二章 金子大榮における「真宗学」

第一節 論文「教行信証の研究」と初期の思索

第二節 真宗学の三問題

第三節 『教行信証』における文章論

第三章 『浄土の観念』の思索

第一節 「観念としての浄土」論の形成

第二節 『浄土の観念』は何を批判したのか

第三節 『浄土の観念』以後の思索

第四章 『浄土の観念』論争（一）

第一節 第一次論争—学の自由と内観—

第二節 清沢満之から金子大榮へ—内観と内感—

第五章 『浄土の観念』論争（二）

第一節 第二次論争—金子大榮における「未来」—

第二節 「死」及び「死後」の問題

第三節 第三次論争—「尊信」と学—

第六章 金子大榮における『教行信証』読解

第一節 如来による二種回向

第二節 行信論について

第三節 『教行信証』の構造

結

序の「はじめに」では、金子大榮の生涯とは完全燃焼である涅槃への歩みであると捉えている。次に「本論の構成」では、浄土を顕らかにして称揚することが金子の生涯を貫く課題であったと述べた後、本論文の構成について示している。最後の「金子大榮研究の状況と本論の位置」では、金子の生涯における思想の展開という観点をもって論考していくのが本論文であると示し、この観点からの考察は従来の研究では不十分であったと述べている。

第一章では、『真宗の教義及び其の歴史』へとまとめられていく初期において、金子の思索には如何なる問があったのかを確かめている。物質的であろうと精神的であろうと、自らの外に如来を立てて救済を取引するような如来観を厳しく問い直し、その上で「如来は自己を超越したる真実の自己である」と金子は述べたと考察している。

第二章では、金子における初期（「理性の価値」、「教行信証の研究」）と中期（「真宗学の三問題」、「真宗学序説」、「真宗学の概念」）と後期（『教行信証の研究』のなかの「教学篇」等）の学問論を取り上げ、金子による学問論の展開を考察している。

第三章では、『浄土の観念』を中心にして金子の浄土観を考察している。金子の浄土観は、『浄土の観念』で大成したと考えられる。「観念としての浄土」という浄土観の概観と成立過程、およびその浄土観によって金子が何を批判したのかを確かめている。また『浄土の観念』以降に浄土観に関する思想がどのように展開していったのかを考察している。

第四章と第五章では、『浄土の観念』を契機として惹起した論争を取り上げている。第四章では、金子と村上専精および多田鼎との論争を取り上げている。第五章では、金子と木村泰賢との論争、また多田鼎と伊藤証信との論争を取り上げて考察している。これらの論争では、金子による浄土観のみならず、それまでの金子の学問論や如来観や未来観などの様々な問題が金子に対して問として投げかけられている。それらの問への応答を通して金子の思索は深められていく。またこれ以降の金子の思索の変遷を追う上においても重要な意味を有する論争であると位置づけてこの論争を考察している。

第六章では、金子自身が『教行信証』における主要問題として示している三点を取り上げて、金子による『教行信証』読解について考察している。その三点とは、第一は如来回向、第二は行信論、第三は『教行信証』の構造である。第一の如来回向に関しては、金子は「往相は心霊の限りなき純化を求むるものであり、還相は肉体の限りなき浄化を願ふものといふことが出来よう」などと述べ、往相回向と還相回向とを衆生の心（霊）と肉体とに対応させた了解を示している。このように特色ある了解を取り上げて、金子による二種回向に関する思索を考察している。第二の行信論に関しては、行信は如来の回向によると

ということが、中期に比べて後期ではより強調されている。この強調が有する意味を、中期の思索（凡夫の能動性や如来の内在性への着目）と対比して考察している。第三の『教行信証』の構造に関して、金子は中期には回向と転入という言葉で論じていたが、後期には「二部作」『教行信証』という構造論を提示している。この構造論によって真実と方便の関係についての新たな了解を金子が示そうとしていることを考察している。

結では、これまで論述してきた内容の要約と今後の研究課題について述べている。

II 論文審査結果の要旨

金子大榮は、浄土や如来などについて根本的な問い直しをし、かつ独自の了解を提示していった人物である。また『教行信証』に関する金子の著述は、現在においても重要な参考書として読み続けられている。そうであるのに、金子に関しての研究論文は多くはない。また全生涯を視野に入れながら金子の思想について述べているものは、伝記類を除けば無いに等しい。このような研究状況において、金子の生涯における思想の展開という観点から論考しているのが本論文である。このような観点からの考察は、金子の思想研究において意義あるものとして評価できる。

本論文は、金子の生涯を三期（初期、中期、後期）に分け、その上で中期に軸足を置いて考察を進めている。その理由は、初期を踏まえて金子自身による思索が形成され結実していくのが中期であると論者は考えるからである。この中期を基盤として後期の思想的な展開もあると論者は捉えている。このように三期に分けて論考したことによって、思想の展開を把握しやすくなったという点は評価できる。また三期のなかで特に中期に着目していった点も、金子による浄土観などの形成や結実が中期にあったことからすれば妥当性があると言えよう。

本論文は金子の思想の核心として、金子による学問論、浄土観、『教行信証』読解という三点を取り上げている。浄土観は、浄土を明らかにすることが「私の思想的運命」であると金子自身が語っているように、金子の存在の根底を貫く課題であった。また『教行信証』読解は、三期を通して繰り返し取り組まれた、金子による親鸞思想研究の中心に位置づけられる事柄である。その浄土観や『教行信証』読解の前提や基礎としてあるのが金子の学問論である。それゆえこれらの三点は金子の思想の核心と捉えてもよいであろう。この三点は相互に密接な関係をもつものであるが、本論文は副題にも示されているように、浄土が金子の生涯の根本課題であると捉えて考察している。金子による思想の全てを浄土に集約して語れるかどうかは検討の余地があるが、一つの観点としては成り立つであろう。

第一章は初期の思索の考察である。如来とは「真実の自己」であるという如来観を提示して、恩寵主義的な了解から脱却した如来観を金子は明らかにしようとしていたと述べている。初期において金子が何を問題や課題にしていたかがよく分かる論述になっている。

第二章は金子大榮における「真宗学」の考察である。あらゆる旧来の前提を払って、宗教的言説に自身の課題をもって向かい合っていくのが「直接研究」である。このような自由で主体的な学び方を金子は提示した。また、親鸞の学び方に学ぶのが「真宗学」である。親鸞思想に肉薄するこのような学び方を金子は提示した。金子による独自の思想はどのような学び方から生まれてきたのか、そのことを探る上での大切な論考になっている。

第三章は『浄土の観念』の思索の考察である。金子による学問論の整備と時期を同じく

して、金子の思索は如来観から浄土観へと展開していった。そのなかで浄土は、常識的実在観における有無を超え離れた世界として捉え直されていき、「観念」（浄土の観念、観念としての浄土）という用語で表されていった。「観念」という語を用いて金子は従来の浄土観の何を批判したのかという考察は、金子による浄土観を明らかにする上で有効な論点であろう。

第四章と第五章は『浄土の観念』論争の考察である。論争は幾種類かの媒体を通して繰り広げられたのであるが、論者はここでも資料を丹念に収集し、論争の流れや論点をよく整理している。またそれぞれの論争を、開始から集結までを視野に入れて論考したことは評価に値する。

第六章は『教行信証』読解の考察である。金子自身が『教行信証』における主要問題とした三点（如来回向、行信論、『教行信証』の構造）を取り上げているが、三点それぞれに生涯における深まりや展開があるという考察は、『教行信証』読解の多様性が示されていて興味深い。

結では、これまで論述の要約と今後の研究課題が示されている。今後の研究課題は、論者自身の課題でもあるが、これからの金子大榮研究が取り組むべき課題の一端を示しているものでもあろう。

本論文全体を読んでみると、金子において学問論・浄土観・『教行信証』読解の三つの事柄が密接に関係しながら思想展開していることがよく分かる。金子の思想の核心として三つの事柄を取り上げた論者の観点は妥当なものと評価できる。

審査員からは以下のような講評がなされた。金子の思想研究に必要な第一次資料を丹念に収集し、丁寧に読み込んでいる点は十分に評価できる。また先行研究もよく踏まえている。さらに論者独自の研究成果も所々に窺われる。それゆえ、先行研究との差異をもっと強調した論述の仕方をしてよかったであろう。三期に分けての考察は概ね有効と思われるが、時期を跨ぐ観点からの考察を示す箇所があってもよい。本論文において重要な用語である「浄土」「観念」「即是の道理」は、『教行信証』、西洋哲学、「即非の論理」などとの関連を視野に入れて、さらに一步踏み込んだ考察を今後の課題としてほしい。また金子における清沢満之の思想からの影響については、論者が取り上げた観点以外から考察することも大切であろう。「二部作」『教行信証』という構造論に関しては、金子が「二部作」と示した意味を明示した上で、論者による考察を展開した方がよい。金子における「内観」と「内感」という用語の使い分けへの着目は、論者の独自性が窺われるので特記するような示し方をしてもよかったであろう。

以上のように、本論文はさらに一步踏み込んだ論考や異なる視点からの考察が望まれる箇所もある。しかし、丹念な資料の収集と丁寧な読み込みを通して、従来の研究では十分ではなかった金子の生涯における思想の展開を、論点を整理した上で考察している点で、学位論文として十分な水準を有するものと評価できる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2017 年 1 月 17 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して東真行に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。